「過去のなかにある未来」

千日山 弘昌寺　鳥居弘昌住職

文・辻村優英（20号輪番編集長）

「ミナミ」（難波駅周辺）は「キタ」（梅田駅周辺）と並ぶ大阪の中心地である。利息はトイチ、「逃げれば地獄まで取り立てに行く」がうたい文句の裏金融を描いた「ミナミの帝王」という映画の舞台だ。そこに千日山弘昌寺がある。

山号の通り、千日前のど真ん中、法善寺のすぐ近くだ。お寺の周りに立ち並ぶのは樹木ではなく、飲食店や風俗店のビルである。取材に伺った時、鳥居弘昌（俗名：鳥居学）住職はこれから焚く護摩の準備中だった。護摩とは、fire ritual と英訳されるように、細長い木（護摩木）を正方形の壇（護摩壇）の中央で燃やし、その炎のなかに本尊を勧請する宗教儀礼である。

通常日本のお寺の護摩壇は、「護摩堂」などと呼ばれるお堂のなかにあり、外からは見えなくなっている。ところが、弘昌寺の護摩壇はビルの軒下にあり、道路と護摩壇を隔てるものはなにもない。護摩壇の前で準備をする住職を見かければ、道行く人が気軽に声をかけ、住職はそれに笑顔で応える。たった15分ほどの準備の間に何人が住職に声をかけただろうか。

弘昌寺には立派な堂宇があるわけではない。ビルの1階の、以前カフェだった1室が寺になった。何百年も続くような古刹などではなく、もちろん檀家は一軒もな

鳥居弘昌（とりいこうしょう）

千日山弘昌寺住職・株式会社鳥居ビル代表取締役社長・TORII HALL 代表
1959 年、大阪市南区阪町生まれ。1982 年、甲南大学卒業。1987 年、株式会社大丸退社。1989 年、会社設立。1991 年、（株）鳥居ビル社屋完成、トリイホール柿落し。1994 年、京都山科勧修寺にて得度。2002 年、千日前一丁目振興町会会長。2005 年、法善寺前本通り商店会設立。2011 年、勧修寺にて灌頂、千日前 1 丁目にて護摩法要始める。2012 年、千日山弘昌寺開山。

い。このお寺の始まりは、住職の眼の前にあるたった一つの護摩壇だった。

「トリイホール」という劇場の経営者でありながら僧侶になった鳥居住職は、弘昌寺を開山するまでのいきさつを語ってくれた。

「トリイホールのある『上方ビル』はもともと旅館『上方』でした」。

鳥居住職の父・鉄三郎氏は千日前にて旅館「上方」を経営していた。そこは、松本幸四郎、尾上松緑、古今亭志ん朝、立川談志、桂米朝、朝丘雪路、津川雅彦、緒形拳など、そうそうたる著名人が出入りする旅館だった。桂米朝をして「粋人やったんやなァと感じ入りました」と語らしめるほど、上方の芸や大阪の郷土史に造詣の深い人物だった鉄三郎氏は学氏が19歳の時に他界する。母・辰子氏も25歳のときに他界。その後、時の趨勢とともに、旅館「上方」は閉店へと追い込まれてしまい、当時大手百貨店につとめていた学氏は退職を余儀なくされる。そこへ、「ここは上方芸能の中心地なのに若手の落語家を育てる場所がない、それを作ってほしい」という桂米朝の声に応えた学氏は旅館「上方」の地に「上方ビル」を竣工、そこに劇場「トリイホール」を立ち上げる。その後、上方芸能の振興に全力を挙げて

邁進した。その最中、35歳のときに最大の転機が訪れる。

「突然産みの親が現れました。それまでずっと、鳥居の両親の子供やと思ってました。そのとき初めて、自分がもらわれてきた子供やという事実を知ったんです」。

自分が父・鉄三郎氏の実子ではない、ということを目の当たりにした学氏は、親交の深かった僧侶にその胸中を相談した。ずっと育ててきてくれた両親の菩提を弔いたい、さりとて別に生みの親がいる、どちらにも恩返しをするにはどうすればよいか。この問いに対して僧侶はこう答えた。仏門に入れば、「家」に関係なく両親の菩提を弔うことができる。学氏の心は定まった。すぐさま得度、僧侶としての名を授かり、「学」から「弘昌」となった。

「実の子と違うのに、うちの両親はほんまよくかわいがってくれました。僕に何不自由ない生活をさせてくれた。うちの両親が愛したこの町を、ずっと守っていく、もっと良くしていくことが、亡くなった両親への一番の親孝行やと思ってます」。

千日前は、大阪の中心をなす都市の一部である。社会学者のリチャード・セネットは「都市」(city) を「見知らぬ者たちが出会う居留地」(a human settlement in which strangers are likely to meet) と定義した。同じく社会学者のジークムント・バウマンはこの定義を参照しつつ、近代社会における見知らぬ者同士の出会いは、「非出会い」(a mis-meeting) であるとした。バウマンのいう「非出会い」とは、過去とのつながりの感覚、会わずにいたあいだの試練・苦悩・喜び・楽しみについての語らい、共有する思い出、共通のよりどころや進展させる共通性といったものが存在しない、「過去のない出来事」のことである。バウマンによれば、こうした出会いはたいてい「未来のない出来事」であり、その場で完結する一回かぎりの偶然にすぎない。そうした都市の状況はモラルの低下を引き起こし、経済の低迷はそれに拍車をかける。

「日本経済が下向きになると同時に町の治安や雰囲気が悪くなって、人通り

も少なくなった。物騒な事件もたくさんあった。ここは商売の町やから、そんなんではやっていけない。もっとたくさんの人に来てもらうには、まず町の雰囲気を良くせなあかん。それで護摩を焚き始めたんです。一番最初に焚いたのは、この町内のど真ん中でしたね……」。

そう語りながら、江戸時代から現在にいたる千日前の歴史的経緯を、鳥居住職は古い地図を指しながら詳らかにしてくれた。過去と今を紐解く住職の姿はまさに飛耳長目、この町への強い思いが滲み出ていた。

「この辺は昔、刑場や焼き場があったところで、たくさんのお墓があった場所です。竹林寺さんと法善寺さんが千日廻向をしていたから、千日前という名前になった。でも今となっては竹林寺さんは移転し、法善寺さんも戦災以

来本堂がありません。昔のようにこの土地で供養しているお寺が無くなってしまった。だから最初はこの土地の鎮魂のために護摩を焚こうと思い、それ以来毎日焚いています。護摩を焚くことで町が良くなっていくと思っています」。

ここで正直な胸中を明かせば、「護摩を焚くことで町が良くなる」という住職の言葉を聞いたとき、「そうですよね」と素直に頷くができなかった。町を良くする取り組みと言えば、ゴミ拾い・植樹といった住民参加型のイベントや、ガーディアン・エンジェルスのような自警団による見回りといった、実際的な手法が思い浮かぶ。実際鳥居住職は、千日前に暮らすフィリピン人たちの孤立化を防いで治安を守るために、彼らの自助組織を立ち上げ、精力的に活動している。新聞にも取り上げられたこの取り組みが評価され、フィリピン領事館からの支援を受けるようになった。鳥居住職の話を聞きながらこうした現実的な手法に大きく頷く一方、護摩に町を良くする効果なんてあるのか?という疑問が頭をもたげていた。空海などが国家安泰のために護摩行を修したように、現世利益的効果が護摩にあるとみなされていることは浅学ながらも知っていた。しかし、それはあくまで観念上の問題であって、現実の町を実際に変えることなんて不可能なのではないか?

「以前、トリイホールで料理のイベントをやりました。舞台上で料理のパフォーマンスが終わってお客さんが帰っていくとき、3人くらいのおばちゃんたちが突然舞台上に上がってきた。何するんかなと思って見てたら、『食べてみたかってん』って言いながらパフォーマンスで使った料理を勝手に食べだして(笑)。もう、こらあかんと思いました。ええ歳の大人がこんな礼節のない態度では絶対町は良くならない。なんでしょうね、『畏れ』みたいな感覚が必要なんやと思います」。

そう語りつつ鳥居住職は千日前の町を少し案内してくれた。護摩の準備をしている時と同様、いろんな人が住職に声をかける。それは、この町の昔を

知り尽くし、今を作ってきた鳥居住職への信頼の表れであろうことは、話しかける人の笑顔が物語っている。そうした人情味あふれる風景を目の当たりにしつつも、繁華街独特の喧騒に身を包まれ、昼間といえどもどこか気を引き締めなければいけない警戒感がつきまとう。

「少し前はこの辺なんか、ほんま暗い雰囲気で、なかなか人も寄り付かへんようなところやったんです。ほんで、ここは……」。

千日前には何度か来たことがあったが、その場所の過去や今がどのような姿をしているかなんて気にかけたこともなかった。仮にどこかのお店で見知らぬ誰かと話をしたとしても、それはまさにバウマンがいうような「非出会い」でしかないのかもしれない。しかし、鳥居住職の案内に触れていると、この町の過去と今とに「出会って」いる気がしてくる。

一通り千日前を案内してもらったあと、弘昌寺の護摩壇が目に入ってきた。そのとき、「護摩を焚くことで町が良くなる」という住職の言葉が脳裏をよぎった。なんとも言えない安心感に包まれ、繁華街の喧騒から身を護ってくれるような弘昌寺の落ち着きを肌で感じたからである。それはどこか身の引き締まるような感覚をもともなっていた。無論、こうした感覚はあくまで主観的なものに過ぎず、一般化することはできない。しかしながら、筆者のなかで、こういうことか、と住職の言葉が腑に落ちた瞬間だった。護摩自体が有するとされる神秘的な力については「わからない」が、護摩が醸し出す雰囲気には何かしらの効果があるのかもしれない。

「護摩焚いてるのが目に入ったら、やっぱりちょっと立ち止まるでしょ。それは、身体の歩みを止めるってことだけじゃなくて、心を止めるって意味でね。そこで一瞬でも自分を見つめ直して、悪いことせんとこって思うかも。自分を超えた何かへの『畏れ』の感覚が芽生えて、ちょっとでも自分の心を落ち着かせて、身を引き締めるような人が増えていけば、だんだん町が良くなっていくと思うんです。不思議なことに、護摩を焚き始めてからほんまに雰囲気よくなりましたからね」。

鳥居住職の手法を、例えば歌舞伎町のような他の町にも応用すれば、同じようにできるだろうか。

「いやー、そんな簡単なもんやないと思いますね。場所への執着が絶対要ると思います。何が起ころうと、そこに骨を埋める、人柱になる覚悟がないときっと続かないでしょう」。

護摩を焚き始めて一年半余り。それはしっかりとした「過去のある」護摩である。自分の過去、自分を育ててくれた両親の過去、そしてそれらを包みこむこの町の過去。こうした過去に真正面から向き合い、支えられているからこそ、この町の明日へとむかう強靭な意志が生まれるのだろう。その意志に支えられた「未来のある」護摩の炎は、今日も千日前を明るく照らしている。